

てる た たきばる
沖縄県南城市前川照田嶽原古墓群の現状記録調査の概要

山崎 真治 大岡 素平 石原 与四郎

An outline of the recording survey about the old tombs at the Gangara valley
(Maekawa Teruta-takibaru Old tombs), Nanjo city, Okinawa pref.

Shinji YAMASAKI, Sohei OOKA, Yoshiro ISHIHARA

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第17号別刷

2024年3月15日

Reprinted from the
Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.17
March, 2024

てる た き ばる 沖縄県南城市前川照田嶽原古墓群の現状記録調査の概要

山崎 真治¹⁾ 大岡 素平²⁾ 石原 与四郎³⁾

An outline of the recording survey about the old tombs at the Gangara valley
(Maekawa Teruta-takibaru Old tombs), Nanjo city, Okinawa pref.

Shinji YAMASAKI¹⁾, Sohei OOKA²⁾, Yoshiro ISHIHARA³⁾

1 はじめに

本稿で取り上げる前川照田嶽原古墓群は、ガイドツアーコースとして公開されている「ガンガラーの谷」周辺に位置する古墓群である。「ガンガラーの谷」は沖縄県南城市玉城前川に所在する観光施設であり、八重瀬町と南城市の境界を南流する雄樋川の左岸に位置する。大規模な石灰岩洞窟の天井が落盤して形成されたカルスト谷内に、サキタリ洞から武芸洞まで総延長約1 kmにわたって自然や地形、遺跡を観察するツアーコースが設定されており、古墓群はその周辺に位置する(図1・2)。近隣には、観光鍾乳洞として著名な玉泉洞(総延長約5 kmのうち約900 mを公開)が位置しており、玉泉洞を中心として主に雄樋川左岸の標高2~40 mに分布する洞窟群やカルスト谷は、玉泉洞ケイブシステム(前川ケイブシステム:鹿島・山内1971、玉泉洞ケイブフェスティバル事務局1992)と呼ばれる(図1 B)。「ガンガラーの谷」や玉泉洞ケイブシステムの起源となった雄樋川は、南城市大里の大城ダムを水源として沖縄島南海岸まで約7 kmにわたる二級河川で、上流部の海成粘土層(島尻層群)地帯を集水域とし、下流部の石灰岩層(琉球層群)を溶食して樹枝状の洞窟群を形成している。特に「ガンガラーの谷」周辺は河道の狭窄部にあたるため、地下の洞窟を含めて複数の流路が存在しているとみられる(石原ほか

2018)。

「ガンガラーの谷」内に位置するサキタリ洞遺跡では、後期旧石器時代から縄文時代(貝塚時代前期)を中心に、グスク時代、近世、近代にかけて(沖縄県立博物館・美術館2018)、武芸洞遺跡では縄文時代を中心としてグスク時代、近世、近代にかけての遺構や遺物が確認されている(沖縄県立博物館・美術館2010)。このほか、周知の遺跡として玉泉洞下流洞口部には前川貝塚があり、その300 mほど上流側には宇和川原半洞穴遺跡が知られている(沖縄県立博物館・美術館2018、山崎2023)。一方、「ガンガラーの谷」が、人々によって最も活発に利用されたのは17世紀に始まる近世琉球期以降であり、近隣の前川集落が18世紀に北東約2 kmにある糸数集落から分村して現在地に移転した後、谷内の河川や湧水は生活用水や憩いの場、河川漁労の場として、洞窟や岩陰は墓地や「毛遊び(モーアシビ)」の場として、さまざまな形で利用されてきたほか、79年前の沖縄戦の際には軍事施設や避難壕として利用された歴史もある(玉城村前川誌編集委員会1986、沖縄県立博物館・美術館2018)。戦後の1967・68年には愛媛大学学術探検部による一帯の洞窟調査が行われ、その価値が広く認識されたことを受けて、1971年にはケイブランド観光株式会社(現:株式会社南都)によって自然公園(現「ガン

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

²⁾ 株式会社 南都(おきなわワールド) 〒901-0616 沖縄県南城市玉城字前川 1336
Nanto Co., Ltd.(Okinawa World), 1336, Maekawa, Tamagusuku, Nanjo, Okinawa 901-0616, Japan

³⁾ 福岡大学理学部地球圏科学科 〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈 8-19-1
Department of Earth System Science, Fukuoka University, 8-19-1, Nanakuma, Jonan-ku, Fukuoka, Fukuoka, 814-0184, Japan

ガラーの谷』)と玉泉洞一帯の整備が行われ、1972年4月28日より観光施設として営業が開始され、現在に至っている(日本ケイビング協会・ケイブランド観光株式会社1972)。

上述のように、「ガンガラーの谷」は古代から現代までさまざまな形で人々によって利用されてきたため、現在でも各所に多くの遺跡や遺構が残されている。中でも谷沿いに点在する近世の石製厨子や陶

製厨子を伴う多数の古墓群は、この谷の歴史を語る上で大変重要な遺跡であるが、これまで詳しい調査は行われていなかった。そこで今回、「ガンガラーの谷」周辺に所在する古墓のうち、特に県道17号線の東側(小字名:照田嶽原)の「涸れ谷」内に位置する古墓群(図2、3)について3次元計測および写真撮影等の現状記録を行ったので、ここではその成果の概要について報告する。

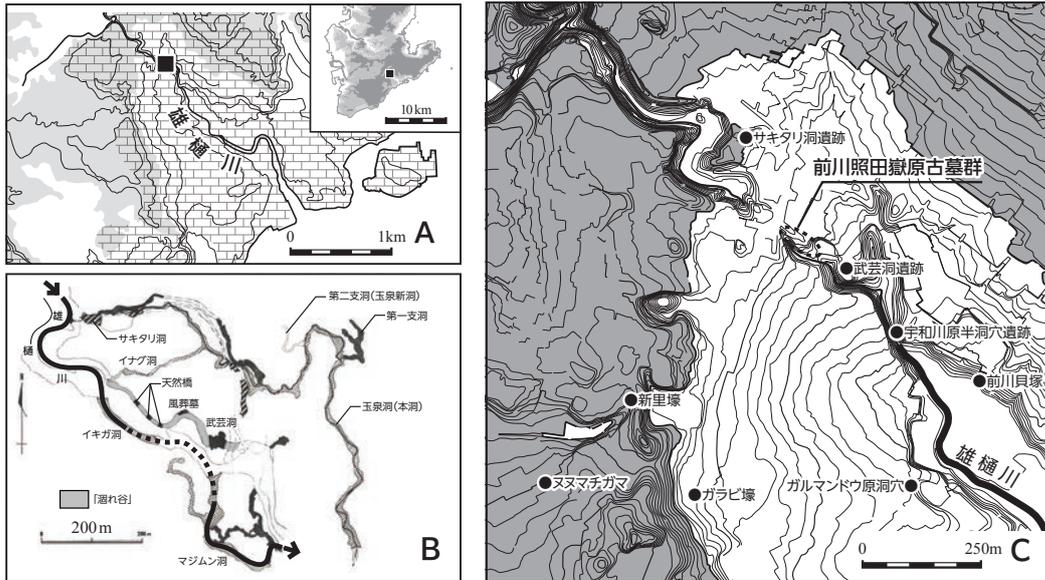


図1 前川照田嶽原古墓群の位置

Bは玉泉洞ケイブシステムの見取り図(日本ケイビング協会・ケイブランド観光株式会社1972 図2を改変)

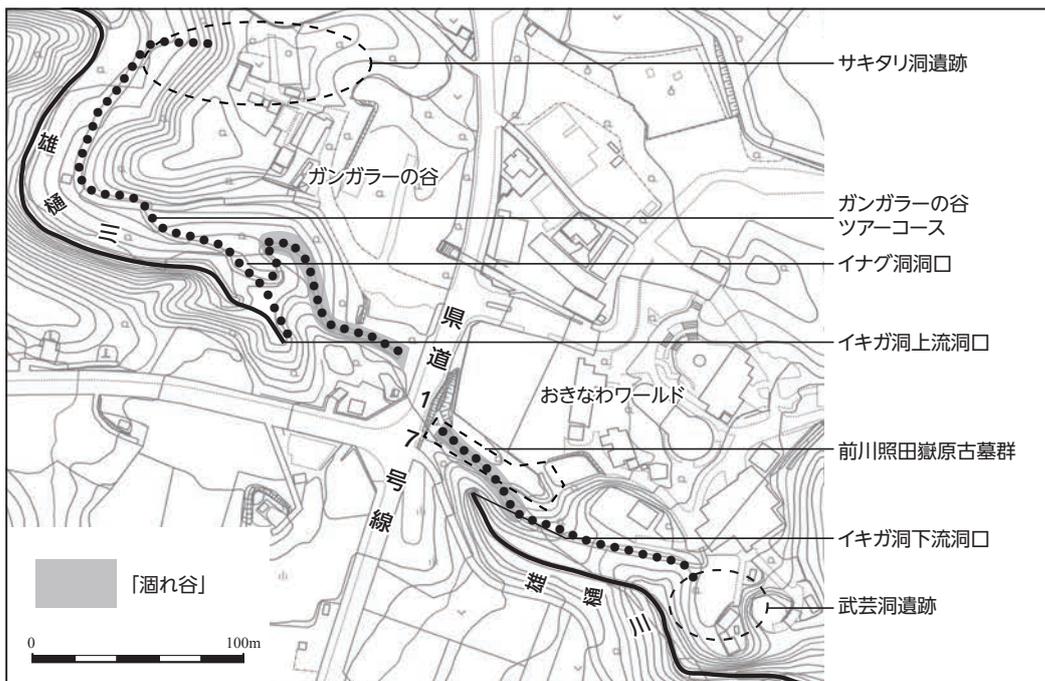


図2 「ガンガラーの谷」周辺の地形図

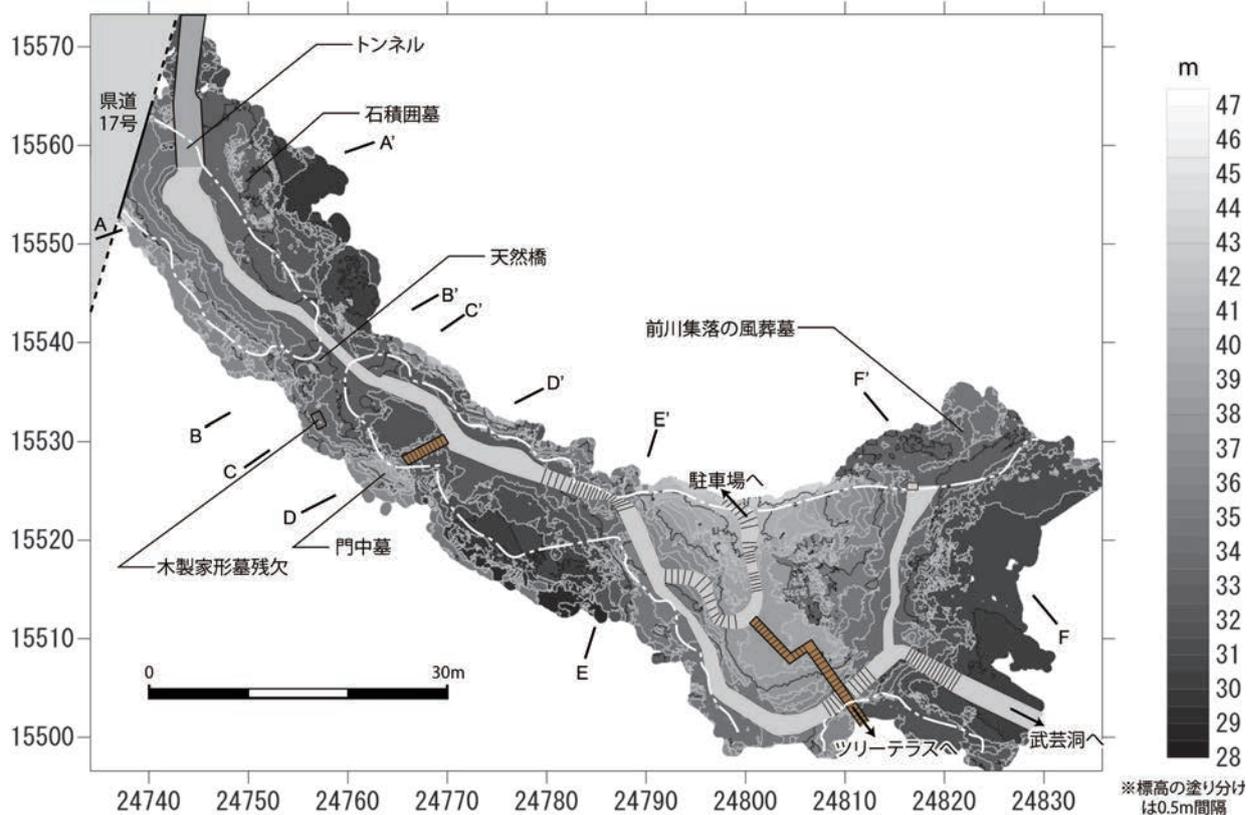


図3 前川照田嶽原古墓群平面図（一点鎖線の白線は谷の上場）

2 位置と環境

今回報告する古墓群は、「ガンガラーの谷」内のイキガ洞に平行して北西－南東方向に約200mにわたって延びる「涸れ谷」区間に位置する。「涸れ谷」を含む玉泉洞ケイブシステムは、主要流路である雄樋川といくつかの異なった時代に形成されていた流路と解釈されている（鹿島・山内1971）（図1 B）。現在水流が定常的に認められるのは、第一支洞や第二支洞から玉泉洞の最下流部、雄樋川上流部、イキガ洞内部などで、雨量の多い夏季には玉泉洞の上流部から下流部までや雄樋川全体に比較的顕著な水流が見られる。これまでに取得した3次元計測データから、玉泉洞の下流側洞口が標高2～3m、雄樋川の下流のマジムン洞洞口が標高約16mとすると、「涸れ谷」の標高は十分に高い位置にあり、鹿島・山内（1971）らは現玉泉洞よりも前に形成された古い洞窟としている。なお、本稿中で示す標高は3次元計測といくつかの基準点を用いて作成した暫定的なものであることに注意が必要である。

今回計測した「涸れ谷」は、イキガ洞を通過して

マジムン洞に至る雄樋川本流に対して、雄樋川がイキガ洞上流洞口に流入する手前の左岸にある「大岩」付近で本流から分岐し、武芸洞に至るバイパスに相当する。「涸れ谷」底部の標高は約30～35mで、イキガ洞洞床（標高約23～25m）よりも十分高い位置にあり、現在は本流の増水時にもこの「涸れ谷」区間に水流が流れ込むことはない。ただし、イキガ洞やマジムン洞付近が堆積物等によって閉塞した際にはオーバーフローした水が「涸れ谷」や武芸洞方面に流入することもあったと考えられ、武芸洞遺跡ではボーリング調査によって後期更新世末～完新世初頭頃の洪水堆積物が確認されている（沖縄県立博物館・美術館2010）。なお、イキガ洞の下流側洞口付近にはかつて厚い粘土層が分布していたが、自然公園整備の際に重機を用いた掘削が行われかなりの部分が除去されている（山内平三郎氏の御教示による）。

この「涸れ谷」区間は、かつては天井をもつ洞窟だったと考えられ、現在でも壁面に二次生成物が形成されているのが認められるほか、天井部分の残る天然橋が3か所あり、西から順に前川第10・11・

12洞と呼ばれている（玉泉洞ケイブフェスティバル事務局1992）。このうち最も大規模な第10洞は戦前から人馬や車両の往来する交通路として利用されており、現在の県道17号線は前川第10洞の上を通過している。

かつては前川第10洞の付近は地形の高まり（小山）になっていたようで、その南側には「ガンガラーの谷」の由来となった前川ガンガラーあるいは前川ガラガラなどと呼ばれた直径50cm程の穴があり、石を投げ込むとガラガラと音がしたという。しかし、太平洋戦争当時、米軍戦車の通行を妨げるため、前川部落の人々が小山を通る道路の片側半分を爆破した。そのとき、前川ガンガラーの穴も無くなってしまったという（中村康雄氏より聞き取り）。

以下では県道17号を境に、便宜的に「涸れ谷」を西地区（小字 浮花原）と東地区（小字 照田嶽原）に区分する。古墓群は「涸れ谷」のほぼ全域に分布するが、特に東地区には大規模な石積を伴う墓や前川集落の信仰対象となっている大規模な風葬墓があり、今回は主に東地区の古墓群について調査・記録を行った。

3 古墓群にまつわる歴史伝承

上述のように、「ガンガラーの谷」の「涸れ谷」部分は、多数の古墓が分布する墓域であると同時に、交通の要衝でもあったため、かつて天然橋の上を人々が往来していた時代には、眼下に古墓群を望むことができ、関心を引き付ける場所だったようである。前川や新城の人々の間には、この付近に出没したという「火の玉」や「マジムン（魔物）」に関する伝承が多く伝わっている（玉城村教育委員会2002）。

「涸れ谷」東地区には、保存の良い古墓として、①前川集落の風葬墓、②門中墓、③木製家形墓残欠（木製家形墓A）、④石積囲墓（木製家形墓BおよびC）があり（図3）、以下ではこれらの古墓にまつわる歴史伝承について記載する。

① 前川集落の風葬墓

おきなわワールドの職員駐車場に隣接した岩陰墓で、谷の左岸側、標高33m付近に位置しており、幅約15m、奥行き6mほどの規模である。前川集落創建当時の風葬墓と言われており、現在では墓地

としては利用されていないが、前川集落の関係者や糸数集落の百次腹（むんなんばら）門中（14世紀頃の人物で糸数集落の始祖にあたる糸数子（イチカジヌシー）の子孫）の人々によって、旧暦3月と旧暦6月に、後述する石積囲墓とともに御願をする祭祀が続けられている（三山時代の戦役の折に、糸数城の出城の戦死者を葬ったとも言われる）（佐南墓三百年祭実行委員会2007：113頁）。墓内には石積みが築かれ、多くの厨子（石製、陶製、木製）とともに、多数の人骨が納められており、人骨については人類学的調査も行われている（Dodo et al. 1998）。厨子や人骨は、本来この場所にあったもの以外に、「涸れ谷」内各所の風葬墓から集められたものも含まれているとのことである（山内平三郎氏の御教示による）。

② 門中墓

大規模な石積みを伴う門中墓であり、谷の右岸側、標高34m付近に位置する。現在では墓地としては利用されていないが、糸満の門中によって祭祀が続けられている。高さ2m程の土台の石積みの上に2重の石牆を設けたもので、墓室の外寸は幅約6m、奥行き約4.5mを測り、さらに墓へ上るための長さ6m程の石段が付属する。墓室内部には陶製厨子や木製家形墓の板材（?）などが納められている。精巧な石門（アーチ）やアプローチの石段などを含め、王国時代の石造技術の水準を物語る貴重な石造建築物である。

③ 木製家形墓残欠（木製家形墓A）

門中墓の西側に隣接し、天然橋（前川第11洞）の直下に位置する木製家形墓の残欠で、谷の右岸側、標高34m付近に位置する。全体の規模は長さ約200cm、幅約110cm、高さ約80cm、四隅の木柱の径は16cm内外を測る。谷内には、このほかに木製家形墓が2基存在するため、ここでは便宜的に木製家形墓Aと呼称する。石を積みあげた低い台座の上に、木柱と板材からなる基部構造が残り、周囲に家形墓の部材と思われる板材等が散乱している。家形墓の周囲には積み上げられた石材が部分的に残されており、かつては家形墓を取り囲むように石積みめぐっていたようである。

④ 石積囲墓（木製家形墓BおよびC）

今回特に詳しい調査を実施した墓で、谷の左岸側、標高34m付近に位置する。周囲に石積を巡らした墓室内に大型の木製家形墓が2基安置されており、内部には多数の人骨が納められている。周囲の石積みは、薩摩藩の琉球侵攻（1609年）後に骨が散乱している様を嫌がった薩摩藩の命令で、人骨を掩蔽するために築かれたものと言われる。糸数グスクにゆかりのヌル（ノロ）達の骨が納められているともいわれ、前述の前川集落の風葬墓とともに祭祀が行われている。この中に安置されていた親ヌルの骨は、大正7年頃ここから糸数グスクの麓に運ばれ、そこに埋葬されたと言う（中村康雄氏より聞き取り）。

戦後は県道側から投棄されたゴミで完全に埋没していたようで、1971年10月から1972年4月まで行われた整備でゴミが除去された際、使用されたトラックはのべ数十台にもものぼったようである。現在でも墓正面の石積みの向かって左下部分が部分的に黒色化しているが、これはゴミに埋まっていた名残とも言われる。また、石積み正面中央の上部がやや凹んでおり、これはゴミを除去した際に使用した重機がぶつかった跡ということである。

この石積囲墓は、一部の関係者にはよく知られており、平敷令治氏の論文（平敷1989）や屋我嗣良氏による新聞記事（屋我1995）、知名定順氏の報告（知名2008）などの刊行物にも取り上げられている。平敷氏は内部の木製家形墓について1983年9月4日に調査を行って寸法の計測を実施しており、屋我氏や知名氏は写真撮影を行っているが、それ以上の詳しい調査は未実施であった（仲地政英氏の御教示による）。

この墓については、今回詳しい調査を実施したので、詳細については後述する。

4 調査・記録の方法

今回の調査は、2020年から実施している玉泉洞ケイブシステムの3次元計測に付随するもので、「涸れ谷」部分については2023年7月21～23日に補足調査を実施した。3次元計測には、イメージングレーザーキャナーLeica BLK360を用い、得られた点群は専用アプリケーションを用いてデータ点を統合した。平面直角座標および標高に関しては、玉

泉洞ケイブシステムの測量で得られている武芸洞の基準点を用いた。統合された点群は植生や映り込んでしまった観光客などの影響を可能な限り除去したあと、点群処理ソフトウェア上で274万点程度に間引いたものを作成し、さらに地理情報システムソフトウェアを用いて等高線図を作成した。また、「涸れ谷」の断面の作成および古墓の一部については同じく点群処理ソフトウェア上で断面の作成や、各面のオルソ投影図および洞窟の天井部を除去したデータセットを作成し、図示した。以下詳細について述べる。

Leica BLK360は小型軽量のレーザースキャナで、スキャンスピードが360,000点/秒、距離精度は距離10mで4mmとされる。コンパクトであることや最長距離が60mであることは洞窟内での計測において非常に有利である（Ishihara et al. 2022）。「涸れ谷」沿いでは、詳細な測定を行った古墓部も含めれば、計119箇所での計測を行った。おおよその点群数は44億点となった。

レーザースキャナで取得されたデータセットは、専用ソフトウェアであるCyclone REGISTER 360 BLK editionおよびCyclone REGISTER 360 PLUS BLK editionにおいて統合し、可能な限り植生や観光客の影響を除去した。特に「涸れ谷」の上部や、下流側では著しく樹木が繁茂しており、谷壁との境界が不明瞭な場所もあった。統合し、植生等のクリーニングを行ったデータセットに関しては、5mmメッシュに1点程度のデータセットとして出力したものを上面図として出力した。また、点群処理ソフトウェアCloudCompare (<https://www.danielgm.net/c/9>) 上でさらに1/10程度に間引きした点群については、2cm×2cmグリッドの中での最も標高の低い点をグリッドの代表点とし、これをもとに等高線図を作成した。洞窟やこのような谷では、概ね十分に点群が得られていれば適切なサイズのグリッド内の最も標高の低い点は、おおよそ平面投影した際の床面を示すものと見なせる。これは洞窟等立体的な構造の等高線を得る上では有効な方法である（Ishihara et al. 2022）。この作業には、地理情報システムソフトウェアであるSurfer (GoldenSoftware) を用いた。

古墓の任意の面に対するオルソ投影画像および「涸

れ谷]、古墓の断面を示す図には、CloudCompareの表示および断面の作成機能を用いて作成した。オルソ投影画像はいずれも点群を表示しており、明るい色調ほどレーザーの反射強度が強く、暗い色調ほど強度が弱いことを示す。「涸れ谷」や古墓の場合、石灰岩が露出した場所は白く、土壌や植生に覆われ

た場所は灰色になる。なお、断面については、点群の反射強度を表示していない。

本稿に掲載する「涸れ谷」東地区の図面および石積囲墓の図面（図3～4、6～10）は、今回の3次元計測の成果にもとづき作成したものである。

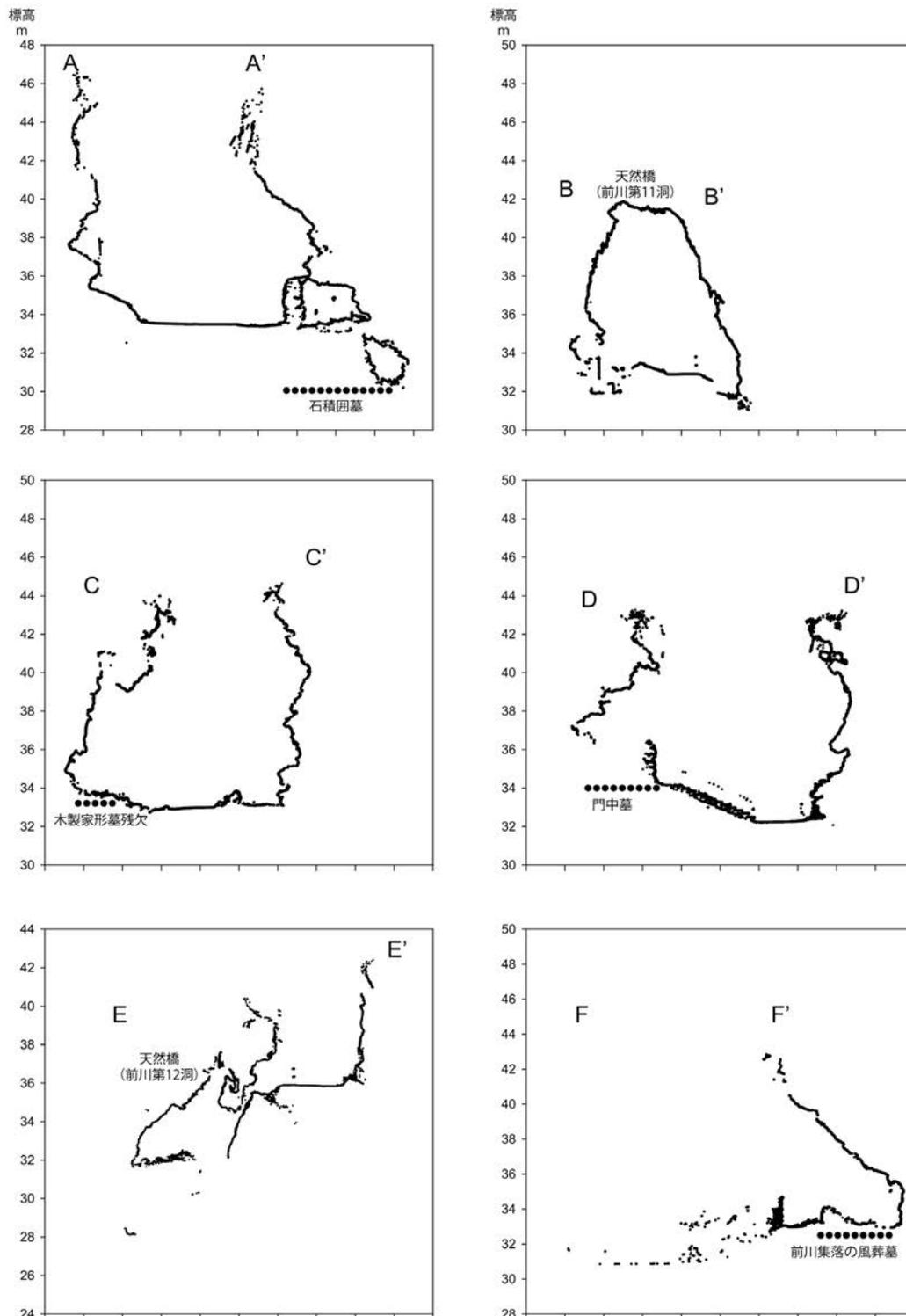


図4 前川照田嶽原古墓群断面図（断面位置は図3参照）

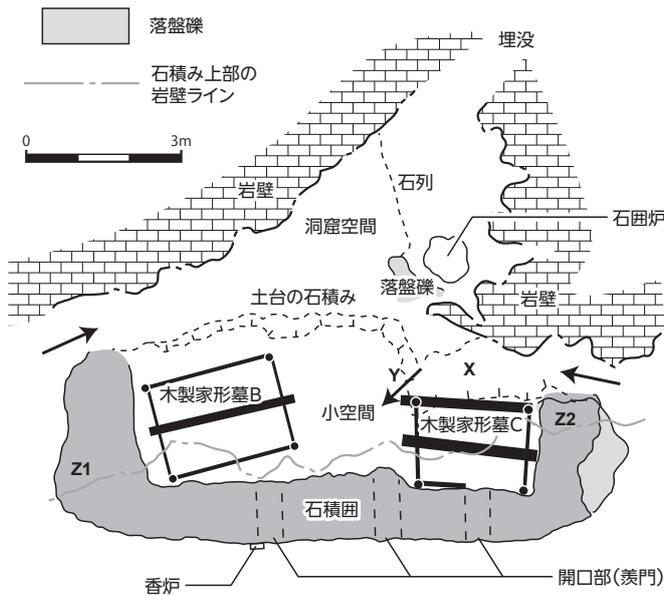


図5 A 石積囲墓の平面見取り図 (図の下方が西)

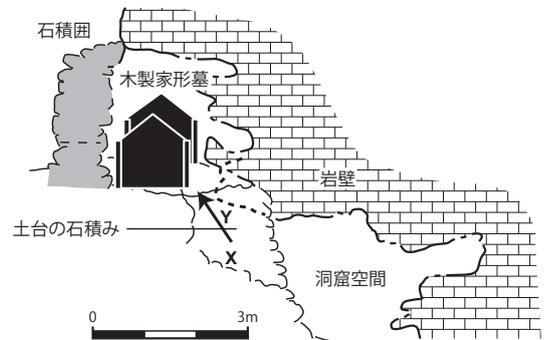


図5 B 石積囲墓の立面見取り図

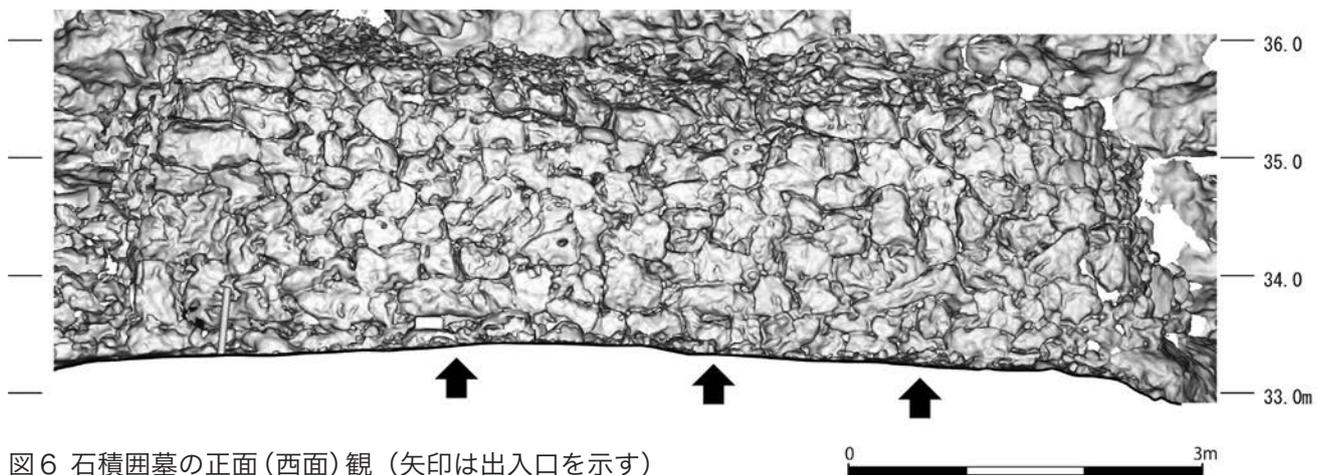


図6 石積囲墓の正面(西面)観 (矢印は出入口を示す)

5 石積囲墓に関する記載

ここでは今回特に詳しい調査を実施した石積囲墓について、詳細を述べる(図5~10)。

5-1 概要

石積囲墓の前面(西面)には、横幅約9m、奥行き約3m、高さ約2.6mのコの字状に巡らされた野面積みの石積囲いがあり、内部には2基の木製家形墓が安置されている。ここでは、北側(向かって左側)のやや大型のものを木製家形墓B、南側(向かって右側)のやや小型のものを木製家形墓Cと呼ぶ。木製家形墓Bの規模は長さ約240cm、幅約

180cm、棟木までの高さ約180cm、四隅の木柱の径は20cm内外を測る。木製家形墓Cの規模は長さ約220cm、幅約160cm、棟木までの高さ約160cm、四隅の木柱の径は20cm内外を測る。石積囲いの正面下部には3カ所に幅・高さとも50cmほどの小さな出入口(羨門)が設けられており、現在は石で封鎖されている。これは2基の木製家形墓と、両者の中間にある小空間へのアクセスを意図した進入路と考えられ、内外の測量成果から見ると最下部50cmほどは地中に埋没しているようである(伝承では出入口は2尺5寸の規模だと言われる:中村康雄氏より聞き取り)。石積囲いは、内外方向の厚みが1m

ほどあり、特に正面側外面は大型の石材を用いてほぼ垂直に面を揃えた積み方がなされている。石材は20~30cm大から大型のものでは1m近いサイズの石灰岩礫が用いられている。一部の石材には赤土が付着していることから、土中から掘り起こされたものが利用されたようである。石積みの内側では、天井に向けてやや持ち送り状に内側に傾斜した積み方がなされており、天井部分は板状の大型石材を石積囲いと奥側の石灰岩壁との間に並べて配置することによって構築されている。一方、両側面の石積みはやや乱雑で、幾分小ぶりの石材を雑然と積み上げており、特に北側側面には大きな隙間が空いているが、

これが当初から存在したものかどうかは不明である。なお、北側側面と南側側面の石積みの周囲には、陶製厨子（破片を含む）の存在が確認できた（図5AのZ1、Z2）。また、図7では表現できていないが、木製家形墓Cの南側、石積みとの隙間には人骨が収納された完形の陶製厨子（甕形）が確認できた。

石積囲いの背後には洞窟状の空間（以下洞窟空間と呼ぶ）があり、左右2カ所の進入路からアクセスできる。この洞窟空間の底面は、地表面から3mほど下に位置しており、洞窟空間側から見ると、墓の土台となっている石積みを確認できる。土台の石積みを使用した石灰岩礫は20~30cmから50cm

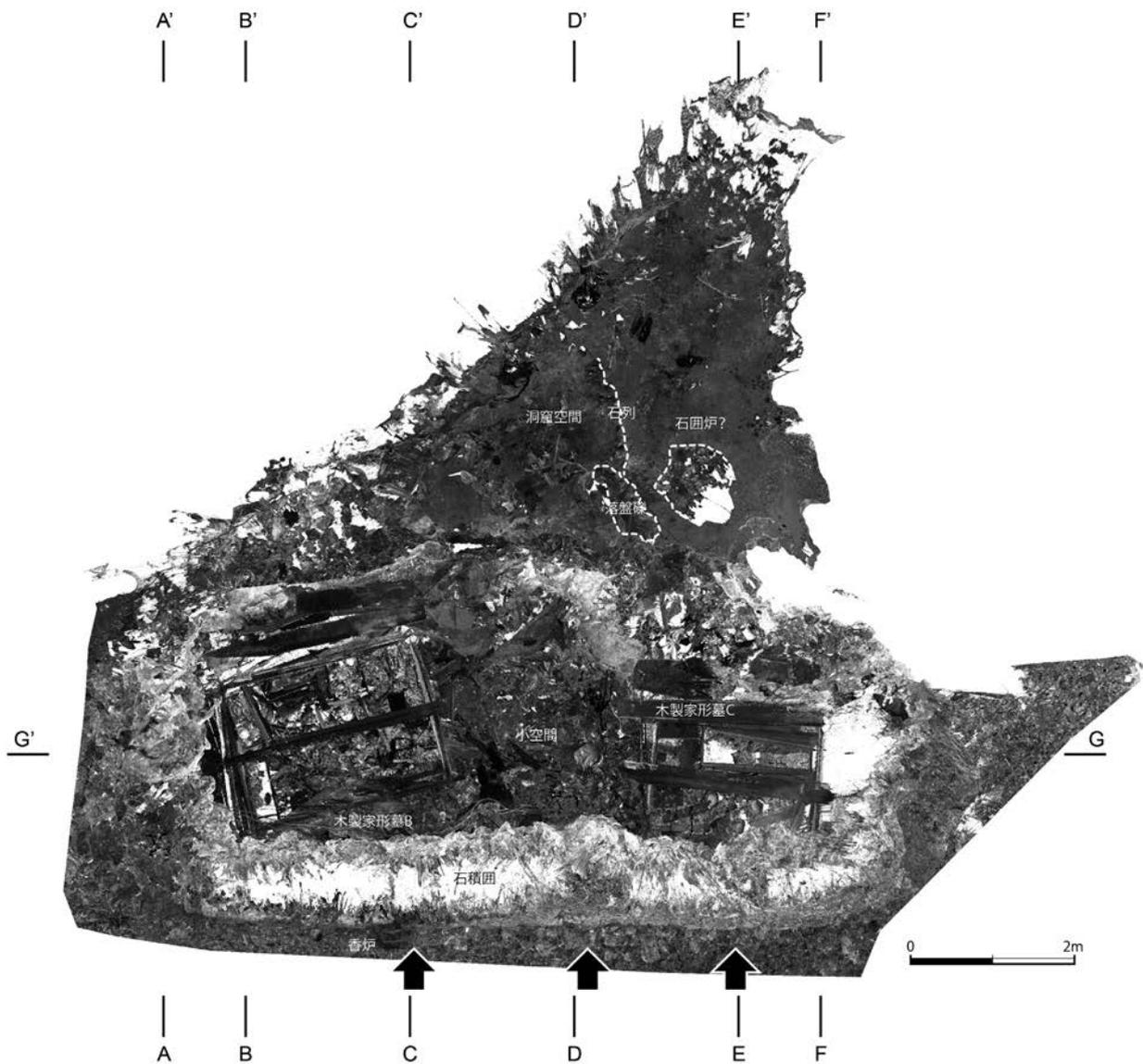


図7 石積囲墓の天井を取り払った平面図（下矢印は出入口を示す。図の下方が西。）

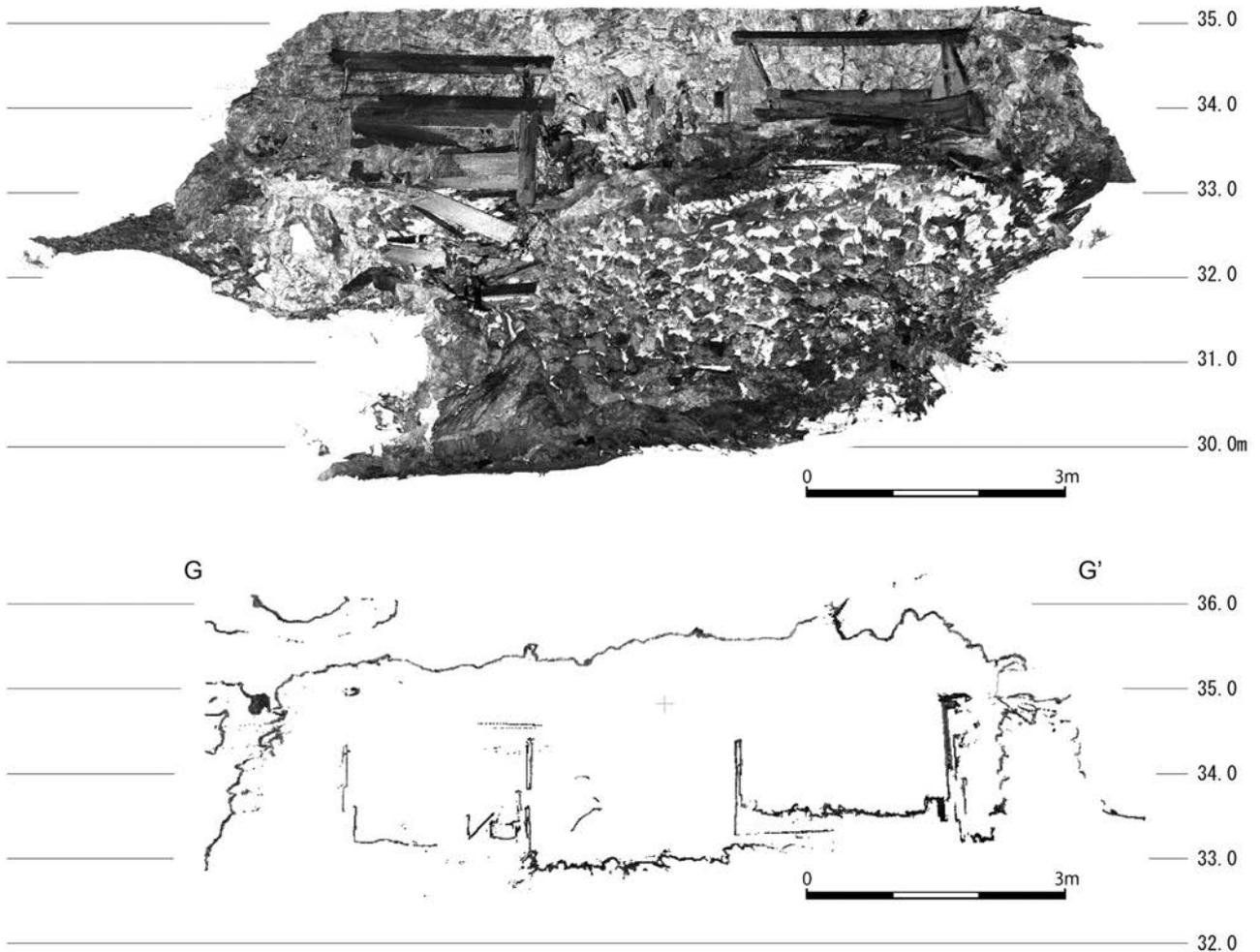


図8 上は洞窟空間側（東側）から見た石積囲墓の立面図（岩壁および天井部分は除去してある）。下はG-G'ラインの断面図。

大のものが中心で、中には1 mを超えるものも認められた。墓正面の石積みとは異なり、面を揃えるような意識は認められず、洞窟空間の底面に対して70度ほどの角度で斜めに積み上げられている。石積みの平面形は、全体としてクランク状を呈しており、背後の岩壁との間に空間を確保するために敢えてこのような形で積まれているようである。なお、木製家形墓Cの土台部分の石積みは一部崩落しており、家形墓の部材の板材を噛ませて石積みを支えている箇所が認められた。また、木製家形墓Cの北東側の柱の根元は土台の石積みの崩落によって「浮いた」状態となっており、墓室と洞窟空間との間をつなぐ隙間が生じている（図5のX→Y）。このような石積みの崩落が生じた要因についてはいろいろ想像できるが、ありえそうな仮説の一つは、墓の内部にアクセスするために意図的に石積みが壊されたとい

うものであり、今回もこの崩落によって生じた隙間から墓室内にアクセスして調査を行った。

このほか、洞窟空間内には直径1 mほどの石囲いを伴う構築物（石囲炉？）が1基あり、周辺には大日本ビールの空瓶が2本残されていた。戦時中に使用されたものであろうか。また、洞窟空間内の各所に墓に使用されていたとみられる板材が散乱しており、中には漆塗りの板材も認められた。

5-2 墓の履歴

今回の調査は表面の観察・計測に留まっているため、この石積囲墓の詳しい履歴を復元する上で利用可能な情報は限られているが、現在までに得られた知見からすると、この墓はおおよそ以下のような手順で構築・利用されたと考えられる。

1. 土台の石積みを構築する

石積囲墓が位置する場所は、大きく張り出した岩庇の下部にあたり、谷の岩壁下部が側方に深く抉りこまれた場所にあたり、墓の建造以前には袋状の空間を呈していたと考えられる。墓の造営にあたっては、まず、この袋状の空間（現在の洞窟空

間）の底面を基盤として、横幅約8m、高さ最大3mほどの石積み（土台）が構築され、木製家形墓を設置するための平坦面が造成されたと考えられる。現在のところ、土台の石積みが構築された具体的な年代は不明である。

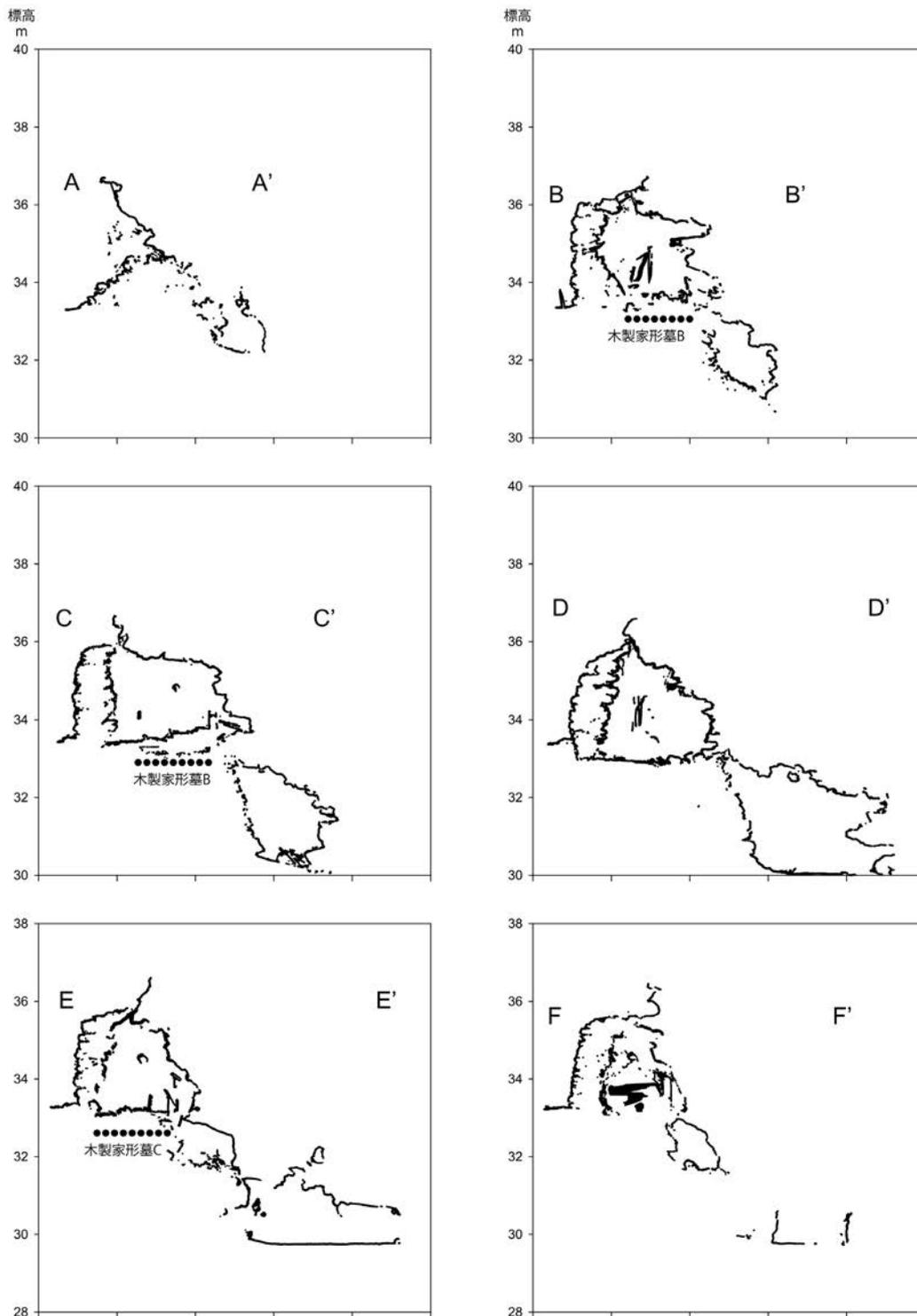


図9 石積囲墓の断面図（断面位置は図7参照）

2. 土台の上に木製家形墓を設置し使用する

次に、構築された土台の上に2基の木製家形墓が設置されたと推測される。木製家形墓はこの場所で建造されたか、あるいは既存のものが運ばれてきた可能性も考えられる。内部には多数の人骨が収められており、所々に補修が行われた形跡も認められることから、ある程度の期間使用されたのであろう。木製家形墓Bは、内部にほぼ隙間なく木棺(板厨子)が並べられており、確認できる頭骨の数も多い。これに対して、木製家形墓Cは内部に納められた木棺(板厨子)や人骨の数も少ないことから、伝承に言う大正7年頃親ヌルの骨が取り出された際に整理が行われたか、あるいは木製家形墓Bよりも後まで使用されていた可能性も考えられる。木製家形墓の具体的用途については未解明の点が多いが、今帰仁村運天の百按司墓(宮城編2004)では内部に板厨子(木棺)が納められていたようであり、宜野座村漢那ウエヌアタイの事例では、遺体の安置と風葬の場(シルヒラシドゥクル)として、さらに洗骨後の納骨の場として使用されていた(知名ほか2006)。

なお、木製家形墓が設置された場所は岩庇の蔭になる部分ではあるが、年月を経て風雨に晒され損傷が進行したと思われる。特に木製家形墓Cは西側の長手側面が顕著に破損しており、南西隅の柱は基部が大きく腐朽している。

現在のところ、木製家形墓が設置・使用された具体的な年代は不明であるが、漢那ウエヌアタイでは木製家形墓の部材から 610 ± 30 ^{14}C BP (IAAA-42647)、 710 ± 100 ^{14}C BP (PAL-1117)の放射性炭素年代が得られており、今帰仁村運天の百按司墓では、木製家形墓内に納められた木棺(板厨子)に明の「弘治13年(1500年)」の年号が記されていたことから、14~15世紀頃に構築、使用されていたものと考えられる。

3. 石囲いの構築

木製家形墓の使用終了後のある時期に、木製家形墓の周囲に石積囲いが構築されたと考えられる。図5Aおよび図10に示すように、木製家形墓Cの破損した西側の長手側面および腐朽した南西隅の柱に接して石積みが立ち上がっており、切りあい関係から、石積みが構築されたのは木製家形墓Cの破損後

だったことが明らかである。また、石積囲い正面に設けられた3箇所の出入口が、木製家形墓B、Cおよび両者の間に位置する小空間に対応していることから、石積みが木製家形墓の設置後に構築されたことがわかる。このことは、薩摩藩の琉球侵攻後に石積みが築かれたという伝承とも矛盾しない。

5-3 墓室内の状況

前項とも一部重複するが、ここで墓室内の状況についてまとめて記載する。

墓室内の広さは $8\text{m} \times 2.5\text{m}$ ほどで、天井までの高さは 2.5m ほどである。この中に2基の木製家形墓があり、北側のやや大型のものを木製家形墓B、南側のやや小型のものを木製家形墓Cと呼ぶ。両者ともに東側の長手側面は一枚板が数段組み上げられているが、西側の長手側面には扉(木戸)が設けられていたようである。また本来は上部に板材で屋根が葺かれていたと思われるが、屋根材は全て外されており、棟木のみが残る。家形墓に用いられた板材は厚さ $4\sim 5\text{cm}$ ほどで、表面には手斧による加工痕が顕著である。

木製家形墓Bは、内部にほぼ隙間なく木棺(板厨子)が納められており(図10上)、いずれも蓋は取り除かれていて、内部に収納された人骨が露呈している。腐朽のためか崩壊した棺もあり、特に手前側(西半部)では著しい。逆に奥側(東半部)のものは比較的保存が良いようである。北側には平面形が細長い長方形を呈する長持形の木棺が2基見られる。

木製家形墓Cは、奥側(東半部)に蓋が外された長持形の木棺1基と崩れた方形の木棺1基があり、手前側(西半部)には木棺はないが人骨や板材が散乱している(図10下)。一部小礫が敷かれたように見える部分もある。前述のように、南西隅の柱は基部が腐朽しており、これに石積みが接している。

木製家形墓BとCの間には幅 2.5m ほどの小空間があり、おびただしい数の板材が散乱していた。板材のサイズは大小あり、木棺の部材と思われる針葉樹材の板材が多いようだが、家形墓B、Cよりもやや小型の家形墓の破風部分と思われる部材も見られた。透かし孔がつけられたものや接合のための鋸歯状の加工が端部に施されたものもあり、百按司墓で見られるような脚付きのいわゆる唐櫃様木棺の部



図10 木製家形墓B(上段)・C(下段)(左列:3次元計測データより作成した平面図、右列:全天球カメラ撮影写真)

材も見られる。さらに、赤や黒の地漆が塗られたものや、漆で唐草様の絵柄や宝珠?様の図像が描かれたものも認められた。前者の唐草様の絵柄は、久米島ヤッチのガマで報告されている漆塗りの板材の絵柄(芭蕉文?)に類似するようである(沖縄県立埋蔵文化財センター2001:巻頭図版8、第107図)。漆塗りの板材の中には極めて保存状態の良いものもあり、注目される。木製品や木材以外の遺物として、ガラス瓶や小型の徳利のような陶器もわずかに認められた。

6 今後の調査研究の進展に向けて

今回、「ガンガラーの谷」内に所在する古墓のうち、特に県道17号線の東側の「涸れ谷」内に位置

する前川照田嶽原古墓群について3次元計測および写真撮影等の現状記録を行った。特に石積囲墓については内部についてもやや詳しい調査を実施し、図面や記録類を作成した。その結果、石積囲墓の構造やその内部に納められた2基の木製家形墓についてやや詳しい知見を得ることができ、多数の木棺(板厨子)やそこに納められた人骨等の存在も明らかとなった。特に漆塗りの板材は、その保存の良さにおいて他に類を見ないものであり、今後詳しい調査の実施が望まれる。また、木製家形墓に使用された木材の放射性炭素年代や樹種については、現在理化学分析を実施中であり、今後その詳細についても報告の機会を得たいと考えている。なお、本稿では紙幅の都合から写真類は多

くを省略せざるを得なかったが、別稿（山崎ほか2024執筆中）において補足を予定しているので、そちらも合わせてご参照いただきたい。

謝辞

今回の調査にあたり、地権者の前川区ならびに前川区とともに祭祀を継承しておられる一般社団法人百次腹門中の皆様には、調査について承諾、同意をいただくとともに、大変お世話になりました。また、以下の機関ならびに個人の皆様には、さまざまな形でご支援、ご助言いただきました。末筆ながら記して謝意を表します。

株式会社南都（おきなわワールド ガンガラーの谷）、南城市教育委員会、浦添市教育委員会
安里 進、大城秀子、大湾ゆかり、木村謙介、金城善、玉城 靖、仲地政英、(故)中村康雄、前田一舟、宮城弘樹、山内平三郎、山本正昭（敬称略）

文献

青山奈緒2010「漢那ウェーナアタイ木製家型墓の保存処理」『宜野座村立博物館紀要 ガラマン』16
沖縄県立博物館・美術館2010『沖縄県南城市武芸洞遺跡発掘調査概要報告書』
沖縄県立博物館・美術館2018『沖縄県南城市サキタリ洞遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
沖縄県立埋蔵文化財センター2001『ヤッチのガン・カンジン原古墓群』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第6集
石原与四郎・吉村和久・大岡素平・佐々木華2018「サキタリ洞遺跡の地形・地質と遺跡形成プロセス」『沖縄県南城市サキタリ洞遺跡発掘調査報告書Ⅰ』沖縄県立博物館・美術館
鹿島愛彦・山内平三郎1971「沖縄島ユヒ地下川洞穴－石灰洞の地質学鉱物学的諸研究－Ⅺ」『愛媛大学紀要 自然科学Dシリーズ（地学）第Ⅳ巻、第4号』
佐南墓三百年祭実行委員会2007『佐南墓三百年祭記念 百次腹門中・佐久堂原門中誌』
玉泉洞ケイプフェスティバル事務局1992『玉泉洞ケイプシステム』玉城村教育委員会・南都ワールド株式会社
玉城村前川誌編集委員会1986『玉城村前川誌』

玉城村教育委員会2002『たまぐすくの民話』
知名定順2008「写真から見る沖縄の墓」『宜野座村立博物館紀要 ガラマン』14 宜野座村立博物館紀要
知名定順・田里一寿・島袋利恵子2006「漢那ウェーナアタイ木製家型墓複製製作に伴う調査」『宜野座村立博物館紀要 ガラマン』12
日本ケイビング協会・ケイブランド観光株式会社1972『玉泉洞』パンフレット
平敷令治1989「沖縄の墓誌」『南島の墓 シンポジウム 沖縄の葬制・墓制』沖縄県地域史協議会
宮城弘樹 編2004『百按司墓木棺修理報告書』今帰仁村教育委員会文化財調査報告書 第18集
屋我嗣良1995「住まいとシロアリ・防除技術の歴史」『琉球新報』1995年5月14日
山崎真治2023「雄樋川流域の洞穴・岩陰遺跡」『第31回九州縄文研究会 沖縄大会洞窟・岩陰遺跡を考える 発表要旨・資料集』九州縄文研究会
山崎真治・大岡素平・石原与四郎2024（執筆中）「前川照田嶽原古墓群の木製家形墓について」『南島考古』43 沖縄考古学会
Dodo, Y., Doi, N., Kondo, O. (1998) Ainu and Ryukyuan cranial nonmetric variation: evidence which disputes the Ainu-Ryukyuan common origin theory. *Anthropological Science* 106 (2) : 99-120.
Ishihara, Y., Kuhara, D., Ooka, S. (2022) Morphology and Spatial Distribution of Stalagmites in Toyoichi-do, Gyokusen-do Cave, Okinawa Prefecture. *Journal of the Speleological Society of Japan* 47 : 15-32.



写真1 谷上部から見た天然橋(前川第11洞)(右)と門中墓(左)



写真2 前川集落の風葬墓(外観)



写真3 前川集落の風葬墓(内部)(全天球カメラ撮影写真)



写真4 谷内から見た天然橋(前川第11洞)と門中墓



写真5 門中墓(左)と木製家形墓残欠(右)



写真6 木製家形墓残欠(木製家形墓A)



写真7 石積冢の正面観



写真8 石積冢背後の洞窟空間（全天球カメラ撮影写真）



写真9 石積冢内部の小空間に分布する多数の板材（全天球カメラ撮影写真）



写真10 木製家形墓Cの南側の石積との間に置かれた陶製厨子（甕形）



写真11 漆で文様が描かれた板材



写真12 唐櫃様板厨子の部材

図12 写真図版02

